

谷崎潤一郎「春琴抄」論

山田麻美

Iはじめに

昭和八年、後に谷崎潤一郎の代表作として数えられる「春琴抄」が『中央公論』にて掲載された。また、同年十二月に創元社にて刊行された。

谷崎は後に「春琴抄後語」において「私は春琴抄を書く時、いかなる形式をとつたらばほんたうらしい感じを與へることが出来るかの一時が、何より頭の中にあつた。そして結果は、作者として最も横着な、やさしい方法を取ることに歸着した。春琴や佐助の心理が書いてゐないと云ふ批評に對しては、何故に心理を描く必要があるのか、あれでわかつてゐるではないかと云ふ反問を呈したい。」と、このように述べている。本文の形式は、「私」という語り手が「鴟屋春琴伝」という冊子やてる女など生き証人の証言を基に春琴と佐助の二人の物語を

構成する形になっている。

この「春琴抄」をいち早く取り上げたのは小林秀雄であると言われ、「谷崎潤一郎氏の「春琴抄」（『中央公論』）——を面白く讀んだ。特に心を動かされたわけでもなし、深く考へさせられたといふでもない、面白く讀んだといふのは消極的な意味なのだが、ともかく讀んでゐる間ちつとも気が散らなかつた。ほんといへば私にはそれだけでも十分である。」と評している。これ以降も、さまざまな作家たちによつてこの「春琴抄」は論じられることになる。多くはこの物語の一番の盛り上がりとなる春琴の顔が何者かによつて火傷を負わされてしまふ、その犯人を言及するものである。

今回、「春琴抄」について考察したいのは、この物語が形成されるにあたって、登場人物たちの行動・言動が

どのように影響を及ぼしているかについてである。本稿では特に佐助と語り手である〈私〉に注目していく。この二人の存在が「春琴抄」という物語の形成にどのような関わっているのか、突き止めたい。

II 梗概

物語は春琴と温井佐助の墓を訪ねる〈私〉が〈鴎屋春琴伝〉という冊子を元にして語りはじめる。

大阪道修町の薬種商鴎屋の次女、春琴（本名は琴）は九歳の頃に眼病により失明して音曲を学ぶようになった。春琴の身の回りの世話をし、稽古まで連れて行っていた丁稚の佐助もいつしか春琴に憧れ、独学で三味線を学ぶようになった。春琴に内緒ではじめた琴も春琴の知るところとなり、周囲の後押しもあって春琴の弟子となる。わがままに育った春琴の相手をさせようという周囲の思惑とは裏腹に、春琴は佐助が泣き出すような激しい稽古をつけるのだった。やがて、春琴が妊娠していることが発覚するが、春琴も佐助も互いの肉體關係を否定し、周囲の後押しがありながらも、結婚を断る。結局、春琴は佐助そっくりの子供を出産した末に無情にも里子に出した。

やがて春琴は二〇歳になり、師匠の死を期に三味線奏者として独立した。佐助もまた弟子兼世話係として同行

した。潔癖で美衣美食をほしのままにし、贅沢の限りをつくす春琴を佐助は以前と変わらさずお世話するけれども、これらの贅沢のために財政は苦しかった。

そんな中、春琴の美貌が目当てで弟子になっていた利太郎という名家の息子が春琴を梅見に誘って口説こうとするが、春琴は利太郎を袖にしたあげく、稽古の仕置きで額にケガをさせてしまう。その一か月半後、何者かが春琴の屋敷に侵入して春琴の顔に熱湯を浴びせ、大きな火傷を負わせる。春琴はただれた自分の顔を見せることを嫌がり、佐助を近づけようとしない。自分の顔を見せたくない春琴の思いに添うかのように佐助は自ら両眼を針で突き、失明した上でその後も変わらず春琴に仕えた。佐助は以前と変わりなく、主従の礼儀を守り続けた。

そして春琴は明治一九年に脚気で亡くなり、佐助もまた、その二一年後の明治四〇年に亡くなった。

III 研究

一、佐助と〈私〉による行爲

この「春琴抄」という物語について、三枝香奈子氏は次のような指摘をする。

「鴎屋春琴伝」の春琴佐助物語を超越し、新たな

〔春琴・佐助物語〕を創造している語り手は、独自に春琴像を創造し、それが「捏造」であつたかを立証してみたい。だが、春琴像とはいかなものか、どのように描かれているのかと言うことについて、まずは考えなくてはいけない。春琴像とは、佐助によって形成されたものであり、実像とは異なる。

本稿においては特に傍線部を施した箇所注目したい。三枝氏はここではつきりと、語り手である〈私〉は「鴎屋春琴伝」の春琴佐助物語では無く、新たな春琴・佐助物語を創造していると断定している。さらに、佐助の語る春琴像は実像とは異なるものであるとも指摘している。一体なぜこのような主張がなされるのか。佐助と語り手である〈私〉、この二人の行為や言動を順に追って考えていきたい。

① 佐助による実像とは異なる春琴像の形成

それではまず、そもそも佐助の語る春琴像とは何かにについて考えていく。

春琴幼にして穎悟、加ふるに容姿端麗にして高雅なること譬へんに物なし。四歳の頃より舞を習ひけるに擧措進退の法自ら備はりてさす手ひく手の優艶な

ること舞妓も及ばぬ程なりければ、師もしばく舌を巻きて、あはれ此の兒、此の材と質とを似てせば天下に嬌名を謳はれんこと期して待つべきに、良家の子女に生れたるは幸とや云はん不幸とや云はんと吹きしとかや。又早くより讀み書きの道を學ぶに上達頗る速やかにして二人の兄を凌駕したりき

これは、「鴎屋春琴伝」からの引用である。「鴎屋春琴伝」とは弟子の檢校、つまり佐助が誰かに頼んで書かせた春琴の伝記であり、その材料は佐助が提供したと考えられるため、実質の著者は佐助と考えられる。このように、佐助は春琴を賞賛しており、それはこの引用した箇所以外からも読み取ることができる。そのような佐助の賞賛を、語り手の〈私〉はしばしば批判的に捉えている。このことはまた後にふれることにする。

春琴をこのように賞賛する佐助と春琴の関係は実際にどのようなものであつたのか。これについても簡単にまとめる。春琴は大阪道修町の葉種商鴎屋の次女であり、幼いころより容姿端麗にして高雅、舞の才能もあつたが、九歳の頃に失明し、音曲を学ぶようになる。佐助は、琴を習いに行く春琴の手を曳いて稽古場まで連れて行く丁稚であつた。当時、春琴は九歳、佐助は春琴の四つ年上の十三歳であつた。この時からすでに二人は主従

関係にあったと言える。佐助は稽古場まで連れて行くだけではなく、春琴の身の回りの世話もするようになり、そしていつしか春琴に憧れて琴を独学で学ぶようになる。しかし、それも春琴の知る所となり、春琴から琴を学ぶこととなった。二人は、師匠と弟子といった関係になり、それは春琴が三味線奏者として独立しても、春琴の眼が失明しても、さらには佐助自身の両目が失明しても、ずっと変わることはなかった。しかし、周囲からすればそれは事実上の夫婦関係であったと捉えられる。師匠と弟子、といった関係から、春琴は佐助に厳しくあたる。佐助は潔癖で美衣美食をほしきままにし、贅沢の限りをつくす春琴を献身的にお世話していく。以下、春琴と佐助の関係性について時系列順にまとめる。

(1) 春松検校の家は韌にあつて道修町の鴉屋の店からは十丁程の距離であつたが春琴は毎日丁稚に手を曳かれて稽古に通つたその丁稚といふのが、當時佐助と云つた少年で後の温井検校であり、春琴との縁が斯くして生じたのである。

↓主従関係

(2) 時に春琴は佐助が志を憐み、汝の熱心に賞で、以後は妾が教へて取らせん、汝餘暇あらば常に妾を師と頼みて稽古に勵むべしと云ひ、春琴の

父安佐衛門も遂に之を許しければ佐助は天にも昇る心地して丁稚の業務に服する傍日々一定の時間を限り指南を仰ぐことゝはなりぬ。斯くて十一歳の少女と十五歳の少年とは主従の上にも又師弟の契を結びたるぞ目出度き

↓師弟関係

(3) そんな譯でとう／＼春琴は我を張り通し妊娠の一件を有耶無耶に葬つて又いつの間にか平氣な顔で佐助に手曳きさせながら稽古に通つてゐたもうその時分彼女と佐助との關係は殆ど公然の秘密になつてゐたらしいそれを正式にさせようとすれば當人たちが餘く迄否認するものだから、娘の氣象を知つてゐる親達は已むを得ず黙許の形にしておいたと見える斯くして主従とも親弟子とも戀仲ともつかぬ曖昧な状態が二三年つゞいた

↓事実上の夫婦関係

このように、本文中から該当箇所を引用して、関係性を主に三つにまとめた。ただし、三つ目の事実上の夫婦関係については、あくまでも春琴と佐助の周囲の人物達から見た関係性である。春琴は「春琴は佐助と夫婦らしく見られるのを厭ふこと甚しく主従の禮儀師弟の差別を

嚴格にして言葉づかひの端々に至るまでやかましく云ひ方を規定し偶それに悖ることがあれば平身低頭して詫まつても容易に赦さず執拗にその無禮を責めた」とあるように、佐助との恋仲を頑なに否定する態度をとる。しかしこのことは佐助の失明後に変化をみせることになる。

とにかく、主従関係からの師匠と弟子、また妊娠という事実上の夫婦関係、二人の関係をどれか一つに限定することはできない。しかし、二人の間には並々ならぬお互いへの執着があつたことには間違いないということができよう。しかし、このような特別な関係を結んでいく中で、佐助にはしばしば眼前の春琴を否定するような箇所がある。

彼が來た時は既に春琴の美しい瞳が永久に鎖された後であつた。佐助は此のことを、春琴の瞳の光を一度も見なかつたことを後年に至るまで悔いてゐない却つて幸福であるとした。若し失明以前を知つてゐたら失明後の顔が不完全なものに見えたらうけれども幸ひ彼は彼女の容貌に何一つ不足なものを感じなかつた最初から圓滿具足した顔に見えた。

佐助は彼女の笑う顔を見るのが厭であつたという蓋し盲人が笑う時は間が抜けて哀れに見える佐助の感

情ではそれが堪えられなかつたのであらう

特に傍線を施した箇所注目する。佐助は春琴の美貌を褒め称えその美しさに酔いしれる。一方で、その逆である美しくないもの、不完全なものに対しては見ることを拒絶する。ここに佐助の自己満足を追求する姿勢がうかがうことができる。

そしてその姿勢がもつとも顕著にあらわれるのが、この「春琴抄」という物語中の最大の悲劇である、春琴の災難にある。

何者かによつて顔に火傷を負わされた春琴。春琴は医者の外には佐助にさえもその火傷の状態を見られることを怖れた。しかし、それは佐助にとつても同じであつた。

思ふに春琴が見られることを怖れた如く佐助も見ることが怖れたのであつた彼は病床へ近づくと毎努めて眼を閉ぢ或は視線を外らすやうにした故に春琴の相貌が如何なる程度に變化しつゝあるかを實際に知らなかつたし又知る機會を自ら避けた。

本文中に述べられているとおり、春琴は顔に火傷を負わされた。それは、佐助がこれまで見てきた春琴の美貌

が破壊されたということである。佐助はその春琴の以前と変わり果てた姿を見ることを怖れた。勝気な春琴も涙を流し、佐助にだけは見られたくない、哀願する。そして、ついに佐助は自身の手で自分の眼を潰し、春琴と同じ盲目の世界の住人となる。その行為は、春琴の見られたくないという思いを汲み取ったものとすれば、美談にはなるが実際そうであったかと言われれば、そうではない節もある。前述の通り、佐助には自身の自己満足を追求する節がある。自分で自分の視覚を奪ったのも、変わり果てた春琴の姿を見たくない、盲目の世界の住人となることで永遠に自分の中に存在する以前と何ら変わらない美しい春琴に酔いしれることができる、いわば自己満足を追い求めた結果でもあると言える。

そして、その結果によってある問題が浮き彫りになる。それは、佐助による現実の春琴とは異なる春琴を形成しようとするところである。

師匠の仕事を譲り受けて瘦腕ながら一家の生計を支へて行つた佐助は何故正式に彼女と結婚しなかつたのか春琴の自尊心が今もそれを拒んだのであらう乎てる女が佐助自身の口から聞いた話に春琴の方は大分氣が折れて來たのであつたが佐助はさう云ふ春琴を見るのが悲しかつた、哀れな女氣の毒な女として

の春琴を考へることが出来なかつたとう云ふ畢竟めしひの佐助は現實に眼を閉ぢ永劫不變の歡念境へ飛躍したのである彼の視野には過去の記憶の世界だけがあるもし春琴が災禍のため性格を變へてしまつたとしたらさう云ふ人間はもう春琴ではない彼は何處までも過去の驕慢な春琴を考へるさうでなければ今も彼が見てゐるところの美貌の春琴が破壊されるされば結婚を欲しなかつた理由は春琴よりも佐助の方にあつたと思われる。佐助は現實の春琴を以て歡念の春琴を喚び起こす媒介としたのである。

對等の關係になることを避けて主従の禮儀を守つたのみならず前よりも一層己れを卑下し奉公の誠を盡して少しでも早く春琴が不幸を忘れ去り昔の自信を取り戻すやうに努め、今も昔の如く薄給に甘んじ下男同様の粗衣粗食を受け収入の全額を擧げて春琴の用に供した

傍線を施した箇所から分かるように、だいぶ氣が折れてきた春琴を受け入れず、ましてやその現実の春琴を自分の中に存在する美しい春琴を呼び起こす媒介としてい

る。その結果によって生じる問題こそ、佐助による現実の

春琴とは異なる春琴像の形成である。だいぶ気が折れてきた現実の春琴を受け入れず、これまでの関係を変えないことで以前までの自信と誇りを取り戻させようとする。現実の春琴は、視覚を失った佐助の中に存在する春琴を形成する媒介である。現実の春琴が変わることは自分の中に存在する春琴も変化することになる。自分の中に存在する春琴に酔いしれるためにも、佐助は現実の春琴とは異なる春琴像を形成しようとするのだ。

② 〈私〉による春琴・佐助物語の創造

次に、この物語の語り手である〈私〉について言及していく。そしてこの語り手である〈私〉について金子明雄氏は次のように指摘する。

〈私〉に残された方法は、言説によって、春琴と佐助の生きた感覚的世界を再構築し、それを媒介にして、二人の経験を追体験することである。つまり、自分の物語る声を聞く、現実の耳の体験を媒介にして、想像的な感覚の世界に没入することにはかならない

金子氏は生きた感覚的世界を「再構築」するといった表現を用いている。表現は違えど、何かを作りあげると

いう点で同じことが言われているのは間違いない。では、この物語における〈私〉の存在はどのようなものだろうか。

まず、「春琴抄」は春琴と佐助という、この二人の生き方が時間軸に沿って語られている。そのとき、語るのは春琴でも佐助でもなく、〈私〉という、第三者による。また、この第三者である〈私〉は、佐助と春琴との直接的な関わりは無い。この〈私〉が手に入れた「鴎屋春琴伝」という小冊子によって、春琴と佐助の二人の物語を知ることになる。これに加えて、春琴の身に災難が降りかかってから九年後、春琴と佐助の家に内弟子として住み込み、春琴が死去した後も佐助に仕えた「てる女」という、春琴と佐助に直接的な関わりがあった者達による証言も、〈私〉が春琴佐助の物語を語るうえで重要となる。

つまり、語り手である〈私〉によって「春琴抄」が創造されるためには、佐助が著者と推定させる「鴎屋春琴伝」という小冊子や唯一一枚残されている春琴の写真という物的証拠と、てる女等生き証人たちによる伝聞によって成り立つのだ。もし、これらが一つでも欠けていたら、それはまた別の「春琴抄」という物語が生み出されただろう。

また、金子氏は、「春琴抄」の物語は、春琴と佐助

と〈私〉の物語として、語る〈私〉の意識の中に、見出されるべきなのである。」と、評している。つまり、この『春琴抄』という物語における〈私〉の位置づけは、佐助と同等、この物語に欠かすことのできない重要な存在といえよう。

語り手である〈私〉は、実際に二人の生きた世界に触れることができない。〈私〉が二人の生きた世界を知るのは、「鴎屋春琴伝」という小冊子と残された者達の証言に拠るのだ。

更に、そんな〈私〉の立場と振る舞いを、三枝氏は次のように述べる。

語り手の興味は佐助の春琴への献身であり、語り手が佐助に同化しようと努める姿勢がそこにはあったのではないかと考える。

その行為が故意であったなら、語り手の佐助に対する同化願望が如実に現れていることにもなるし、無意識であるのなら、語り手は同化願望を超えて既に実践しているのではないか。

ここで、語り手の佐助への同化願望は願望にとどま

らず、物語の中において具現化せしめたとも言えるのではないか。

一つ目の主張は語り手である〈私〉が佐助に相当な興味関心を抱いていることを根拠立てて指摘している。二つ目の引用における、その行為というのは、『春琴抄』の冒頭における〈私〉の春琴と佐助の墓石に対する態度のことである。春琴の墓前における〈私〉の「春琴女の墓前に跪いて恭しく礼をした」という行為をさす。三つ目の引用では、ここに至るまでに言及してきた語り手から佐助への同化願望がこの「春琴抄」という物語の中で具現化されたことを指し示している。引用した三つの共通点として、どの引用も「同化」もしくは「同化願望」という語がある。

そして、ここで金子氏の見解も引用する。

春琴の姿を今に伝える、空想よりもつとばやけてゐるような、一枚の〈朦朧とした写真〉を持つ〈私〉は、初めから、象徴的な意味で、視覚を拒否していたとも言えよう。だからこそ、佐助と共に、観念の中の春琴像を求めたのである。また、春琴の〈墓前に跪いて恭しく礼をした後〉、佐助の墓石の〈石の頭を愛撫〉する〈私〉が、佐助の分身であろうとし

ていること（あるいは、佐助を自らの分身としようとしていたこと）も、自明であろう。確かに、〈私〉に失明願望があると考えるのは、想像が過ぎるであろうが、春琴と佐助の生きた世界を、二人と共有しようとする願望が伺えることは、間違いない。

金子氏は明確に「同化」もしくは「同化願望」という言葉を用いてはいない。しかし、傍線を施した箇所からは、それに近い見解を持っていることを示していると考えられる。以上、三枝氏と金子氏は、語り手である〈私〉には佐助への同化願望、とまではいかなくてもそれに限りなく近い思いを抱いていると考えていると捉えられる。

三枝氏と金子氏が指摘するように、この語り手である〈私〉の佐助へと同化しようとしているかのような言動がこの物語に存在している。しかし、この「春琴抄」という物語からうかがうことができる〈私〉の言動はただ同化願望によるものだけであるのだろうか。

語り手である私がこの春琴と佐助に相当な興味関心を抱いていることは間違いないと考えられる。冒頭で、佐助と春琴の墓前において、佐助の墓石に手をかけてその石の頭を愛撫し、春琴の墓前では跪いて恭しく礼をす

る、そのような一連の動作からも何か特別な思いを抱いていることは推測できる。一方で、語り手である〈私〉は、この「春琴抄」という物語において主に〈鴉屋春琴伝〉の著者と推定される佐助への批評も織り交ぜながら物語を紡いでいく。以下、〈私〉による、批評を加えている箇所を抜粋する。

これらの記事が春琴視ること神の如くであつたらしい
 檢校から出たものとすればどれほど信を置いてよ
 いか分らないけれども

その朦朧とした寫眞では大阪の富裕な町家の婦人らしい
 氣品を認められる以外に、うつくしいけれども
 此れといふ個性の閃めきがなく印象の稀薄な感じが
 する

此の事に限らず檢校の説には春琴女の不幸を歎くあまり
 知らず識らず他人を傷つけ呪ふやうな傾きがあり
 俄かに悉くを信ずる譯に行かない

多分此の説の方がほんたうなので彼女の眞の才能は
 實は始めより音楽に存したのであらう舞踊の方は果
 してどの程度であつたか疑はしく思はれる

二つ目以外の箇所については検校の説の信憑性が低いことを述べている。また、二つ目については、実際に語り手である〈私〉が唯一、春琴の実像に近づくことのできる物的証拠についての批評である。こういった批評がなされるのも、それだけ語り手である〈私〉の興味が春琴と佐助に向いているということの証明になると考えられる。しかし、こうした批評を交えることで、語り手である〈私〉はこの春琴と佐助の二人の物語を第三者の視点から把握しようとする。また、この「春琴抄」という物語は、春琴・佐助物語としばしば呼称される。それはつまり、この二人がこの物語の中心人物であることを表現する。しかし、この「春琴抄」という物語全体を考えると、これを形成するのは語り手である〈私〉であり、春琴と佐助はいわばプレイヤーということになる。

しかし、物語が進んでいくうちに、第三者として批評をしているようである〈私〉の立ち位置が、変化している箇所がある。

眼明きでありながら盲目の春琴と同じ苦難を嘗めようとし、盲人の不自由な境涯を出来るだけ體驗しようとして時には盲人を羨むかの如くであった彼が後年ほんたうの盲人になつたのは實に少年時代からの

さういふ心がけが影響してゐるので、思へば偶然でないのである

必ずお顔を見ぬやうに致します御安心なさりませと
何事か期する所があるやうに云つた。

一つ目の本文からの引用の箇所は佐助が春琴には内緒に独学で音曲を始め、その際に佐助が春琴と同じ盲目の世界に浸ることを喜び、目をつぶって稽古をしている場面後の文章である。ここで語り手は佐助のそういう振る舞いが後年本当の盲人になる際に「影響してゐるので」と断定している。二つ目の引用の箇所は、春琴の顔が何者かによつて火傷を負わされ、それも大分癒えてきた時、春琴がそれでも佐助にだけはこの顔は見られたくないと涙を流して哀願する、それに続く佐助の言葉である。その佐助の言葉の裏に何か考えがあるというところを「期する所があるやうに……」とし、まるで佐助の心中を知っているかのような〈私〉が物語中に存在する。それはまるで自分が佐助本人であるかのような振る舞いである。そのため、しばしば読者は錯覚を起こしてしまうのではないか。〈私〉とは佐助本人ではないのかとまたそうはいわなくとも、この二人の生きた世界に確かに存在し、二人のそばにいたのではないかと。この錯覚

こそ、〈私〉が佐助に対して同化願望を抱いているという主張につながると考えられる。

しかし、前にあるように、語り手である〈私〉は、佐助の言動に対して基本的には否定的に捉えている。第三者の立場として、春琴と佐助の物語を掌握し、批評する。まるで自身の佐助になろうとすることを否定するかのように距離をとろうとしている。それはまさに同じ趣味・思考を持つ者を嫌う、「同属嫌悪」から生じるものである。

つまり、語り手である〈私〉の振る舞いをただ同化願望に基づく行為であるということではできない。二人の生きた世界に近づこうとする反面、佐助を批評することによってどこか距離をとろうとする。そんな〈私〉のなかにある「同化願望」と「同属嫌悪」という相反する二つの感情のせめぎあいがこの「春琴抄」の中からうかがうことができる。また、その〈私〉の中にある二つの感情のせめぎあいこそが、この「春琴抄」という物語を形成するうえで重要であると言える。

IV 終わりに

これまで、この「春琴抄」という物語に登場する佐助と、語り手にあたる〈私〉のこの二人の人物について注目してきた。春琴の弟子であり事実上の夫婦関係である

佐助は自身の自己満足のために現実の春琴とは異なる春琴像を形成した。語り手である〈私〉は「鴎屋春琴伝」を越えた新たな春琴・佐助物語を創造している。また、〈私〉はその佐助の行為を批判する一方で、まるで自身が佐助であるかのようにふるまう二面性を持っている。その二面性というのは「同属嫌悪」と「同化願望」であり、その二つの感情のせめぎあいこそがこの「春琴抄」という物語を形成しているとまとめた。佐助の実像とは異なる春琴像の形成、〈私〉の中にある「同化願望」と「同属嫌悪」による二つの感情、これらどれか一つでも欠けていたらこの春琴抄という物語が創造されることは無かつたであろう。

V 参考文献

- ・『谷崎潤一郎全集 第一三巻』（昭和四二年、中央公論社）
- ・『谷崎潤一郎全集 第二二巻』（昭和四三年、中央公論社）
- ・『日本近代文学大事典 第二巻』（昭和五二年、講談社）

- ・永栄啓伸『谷崎潤一郎論 伏流する物語』（平成四年、双分社）
- ・『小林秀雄全集 Xへの手紙 第二巻』（平成一三

年、新潮社)

VI 先行研究

・金子明雄 「物語る声 声の物語谷崎潤一郎『春琴抄』と私」

『国文学 解釈と鑑賞719』平成三年四月号)

・三枝香奈子 「谷崎潤一郎『春琴抄』論語り手による歪曲化された春琴像」

『フェリス女学院大学日文学院紀要8』(平成一三年三月)

〔付記〕本稿は、第七回おのみち文学三昧(尾道市立大学日本文学会)での口頭発表「谷崎潤一郎『春琴抄』論」(於尾道市しまなみ交流館 二〇一五年二月五日)を基に、加筆・修正したものである。会場内外よりご質問をいただいた皆様に、お礼申し上げます。

—やまだ・まみ 日本文学科四年生—